いのちの重さとは

いのちを育む現場から

熊本ハーベストチャーチ牧師
熊本ＹＭＣＡ学院非常勤講師・
ＹＭＣＡ高等学校非常勤講師
中村　陽志さん

命の尊さについて不変の価値観を育みましょう

学院では、「結婚前の性交渉は行ってはいけない」と、はっきりと伝えています。「先生は古い」とも言われますが、体が大人になっても精神的に大人になったわけではありません。しかし、性交渉＝命を授かることという責任は自覚しなくてはなりません。そのような人間としての本質的な性と死、生きることを教えるのは、大人の責任。命は尊いものであるという価値観を育む基盤は家庭にあります。私は、性的な乱れは家庭環境によって防ぐことができる部分が大きいと思っています。

そして、若い人たちは自分の体を守り、性交渉によって男女の関係を確認するのではなく、精神的な繋がりをこそ深めてほしいと願っています。子を宿すことは、人間としての責任です。大人側のどのような都合よりも、神様から授かった命の方が重いのです。殺される赤ちゃんには何の罪もありません。ですから母親にとっても、人工中絶する罪悪感より、出産して命を尊重したという満足感を与えられる方が、人生における最善の結果になると思っています。

私たちの生き方について、正しく不変である価値観は、聖書に書かれています。命は、神によって何らかの目的のもとに与えられたもの。子を産めない人にも、偶然の命を宿した人にも、そこには神が与えた目的があるのです。私は、聖書から得られる正しい価値観、命を尊ぶ男女のあり方を発信していきたいと思っています。

他者の命を大切にする生き方を

保護者・上妻和代さん

私自身が福祉の仕事をしていたので、命の大切さを今一度考え直すよい機会をいただきました。成人した子は男の子。これから付き合っていくことになる女性を大切にし、望まない妊娠をすることがないように、人の命を大切に考える生き方をしてくれるようにと心から思いました。また、子育て中の早い段階で、もっと性について話し合う機会を設けておけばよかったとも感じています。今回の講演を忘れずに生きてほしいと思います。

命をつなぐ体を大切に守ってほしい

保護者・中山栄子さん

娘を持つ親として、何より願っているのは、子どもたちが自分を大切にしてほしいということ。これから赤ちゃんを産み、命を繋いでいくことになる若い女性は、まず性感染症や望まない妊娠などから自分の体を大切に守ることを考えてほしいですね。また、講演を聞きながら、3人の子育て中に撮った写真を思い出しました。家族みんなで、「あなたたちを大切に育ててきたのよ」と見直し、命の大切さを話すきっかけにしたいと感じました。

YMCA学院　成人を祝う会　講演会を聴いて

国際ホテル科1年　金森　匡彦さん

「こうのとりのゆりかご」が設置されると聞いた時は、私はいいことだと思いました。しかし、同時に難しい問題だとも思いました。遺棄されるはずの赤ちゃんが助かるという大きなメリットと、安易に赤ちゃんを預ける人がいるのではないかという心配。また、施設に引き取られる、養子になるなど正しく、本当の親の顔を知らずに育つという現実。何が正解かなんて決めることができない、非常に複雑な内容だからです。

講演を聴くまでは、親の側に責任があると思っていました。しかし中には、望まない妊娠によってやむをえなかった人もいるなど、親が悪いと一概には言えない事情のあることを知りました。私自身は、結婚も親になることもまだ想像もできません。ただ、将来自分が親になった時には、自分の行動にしっかりと責任を持ちたいと思います。

赤ちゃんの幸せがもっとも大切。赤ちゃんにとって何が幸せかということを考えるべきだと思いました。「こうのとりのゆりかご」のような制度は必要なくなることが一番だと思います。

生涯スポーツ科2年　中島　瞳さん

「こうのとりのゆりかご」に赤ちゃんを預ける人は年々増えていると聞いて、とても驚き、悲しくなりました。赤ちゃんを産むことは簡単なことではありません。だから、授かった命をもっと大切にしてほしいと思います。

一方で、16歳の女の子が妊娠して、親に言えない気持ちもわかるような気がします。大切に育ててくれた親に申し訳ない気がするし、働いてもいないので、自分で育てていく自信が持てないだろうと思います。しかも、16歳ではこれから自分がやりたいことだっていっぱいあるでしょう。しかし、どのような行動がどのような結果につながるのか、想像はできるはずです。もっと自分の行動に責任を持って行動することが大切だと感じました。

国際ホテル科1年　福島　紗知さん

驚いたのは、熊本の年間人工中絶率が全国で1位だということです。望まない妊娠や、育てられないことが理由で中絶することがあるのは知っていたけれど、私たちが暮らすこの熊本でたくさんの命がなくなっていることを知って、悲しい気持ちになりました。

子どもを育てられないと公園に産み棄てる事件や暴力を振るい死亡させるなど、いたたまれない問題が実際に起きています。いろいろな課題はあるとしても、「こうのとりのゆりかご」に子どもを預けることで、一人の命が救われることは確かです。映像で、預けずに、自分の手で育ててほしいと涙を流す医師の姿が印象に残りました。

幼少期にたくさんの愛情を注ぐと、愛情を持った子どもに育つことも知りました。将来、自分が結婚して、子育てをすることになったら、きちんと愛情を持って子どもに接することができるのか不安です。しかし、子どもを産むことのできる喜びや、成長を見守る楽しみは大きいはずです。生まれてくる命、今ある命を大切にしていこうと思いました。

児童福祉教育科1年　井野　明さん

「こうのとりのゆりかご」が設置されてから、私自身、賛成か反対かを考えてきましたが、「どちらとも言えない」が私の答えでした。産んで育てられずに死亡させるよりは、預けられてでも命が助かるほうがいいとは思いながら、預けられ親元を離れて暮らすのはやはり悲しいことだと思います。母親以外にも、おじいちゃんやおばあちゃんが「こうのとりのゆりかご」を利用することがあると聞き、さらに悲しくなりました。

講演で印象に残ったのは、マザー・テレサの「愛の反対は憎しみではなく、無関心」という言葉。子どもに対し関心がないというのは、子どもの心を傷つけることになるのではないでしょうか。

愛情をたくさんもらったかどうかが、将来の人間性にも影響するらしいので、乳幼児期はとても大切な時期だと思います。私は将来、乳児院で働きたいと思っているので、今回感じたことを忘れずに今後に役立てたいと思います。